第七講　傍線部理由説明問題解法　40分

次の文章は野崎歓「翻訳、このたえざる跳躍」（岩波書店編集部編『翻訳家の仕事』）である（設問の都合で表記を改めたところがある）。読んで後の問いに答えよ。

原語ですらすら読めるなら、翻訳を介する必要はない。翻訳はしょせん原語に通じていない人間向きの補助手段なのだ。ときおり、事もなげにそう言い切る人に出会って、こちらはいささかたじろいでしまう。一見もっともな意見だ。しかし実際には、そう断言できるほどの高度にして多様な外国語読解力を身につけている人間が、世の中にどれほどいるだろう。世界文学を遍歴する愉(たの)しみなど、翻訳の助けを借りなければ味わうことは不可能である。たとえば僕はいま『白鯨』※を夢中で読み進めている。八木敏雄氏による新訳である（岩波文庫、二〇〇四）。上巻を一息に読み終えて、なぜ全巻揃(そろ)いで出してくれないのだとうらめしく続刊の到着を待っているところだ（その後、全三巻は無事完結）。

A <u>待つ間を惜しんで、メルヴィルの原文に移行しようという気には残念な</u>

がらならない。少しばかりのぞいてみるだけだ。翻訳でしか読めない無念が痛感されるならば、もう少し英語力をなんとかしようと頑張りもするのだろうが、訳書を堪能するだけで満足してしまい、その必要をさして覚えない。そればかりか優れた訳書に接するとき、自分は「翻訳文学」を読んでいるのだという意識がどこか心地よい刺激となって作品の面白さを増し、読書の悦（よろこ）びをひときわ掻（か）き立ててくれる気さえする。本職であるフランス文学についても、そうした事態がしばしば起こる。これはどういうことなのだろう。

モービィ・ディックはなぜ白鯨という異名をとったのか。「白昼に濃紺の海を銀河のような乳白色に泡だつ航跡を黄金色にきらめかせながらすべってゆくあざやかな雄姿を目撃したほどの者は、その命名の適切さに首肯せざるをえない」のだと語り手は言う。ご覧のとおり訳文には、安易な「意訳」を排し、学究的蓄積の上に立って原典を忠実に訳したものに違いないと思わせる感触が備わっている。あるいは「硬い」と見える部分があるかもしれない。だがそれが驚くべき自在で力感あふれる日本語による訳業であることは、少し読んでみればすぐに理解される。解釈に踏み込んだ注も大いに楽しみながら、手軽な文庫本でこれほどの知的興奮を与えてもらえることに感謝するばかりなのだ。

「されば、生命を賭して白鯨を追う者たちが、かみくだかれたボートの破片や引き裂かれて沈みゆく同僚の手足がただようさなか、鯨の不吉な憤怒がかもす凝乳のように白く泡立つ海面を泳いで、まるで幼児か花嫁にほほえみかけるように静謐（せいひつ）で、あっけらかんとした陽光がふりそそぐあたりに避難したとき、彼らがいかほど狂おしい怒りに燃え立つことを余儀なくされたかは想像にかたくあるまい。」

こうした文章のありさまを翻訳調で「不自然」だという人もいると思う。しかしながらB<u>優れた翻訳とは、どうしたって「翻訳調」を帯びる</u>ものではないだろうか。単にぎこちないとか、読みにくいということではない。まさに白鯨のごとき強烈な躍動と生命力をもつ異国の名作を捕獲しようとする闘いは、当然のことながら「海面」にさまざまな痕跡を残すはずだ。その泡立ちのさまは実にスリリングな読みどころではないか。異言語とのつばぜり合いをとおして逞（たくま）しい筋肉を浮き上がらせるかのような日本語の勇姿に僕は惹（ひ）かれてしまう。

もちろん、逆に一介の翻訳者として考えてみれば、常にモービィ・ディックなみの怪物をターゲットにするとは限らないし、わき腹に槍を突き立てられながらも平然と泳ぎ去る白鯨を執念深く追いかけるエイハブ船長こそが翻訳者の普遍的イメージだというわけでもない。たとえば怪物的な巨鯨

ではなくても、一匹の猫を訳すことにだって、翻訳のささやかな愉しみは確かに存在する。

　拙訳が本邦初紹介となった、クリスチャン・ガイイの『ある夜、クラブで』（集英社）という作品。現代フランスの、小品ながらなかなかいい味わいの恋愛小説だ。最後のところに黒猫が登場する。すぐにかんしゃくを起こす暴れん坊なのだが、クライマックスで目を瞠（みは）るような存在感を示す。ごろりと寝そべったメスの黒猫の、抜け毛の散った机に向かって翻訳に精を出す者としては、そのオスの黒猫の活躍をぜひとも引き立ててやりたい。

「なんていう名前だったっけ、シュジーの猫は？」というのが、その作品最後のフレーズになっている。そう、問題は名前なのである。フランス語でDingo、もともとは「気の触れた」という意味の形容詞で、手に負えないわんぱく猫だからそんな名前をつけられてしまったわけだ。しかしこれを発音すると「ダンゴ」だ。黒猫の団子では可哀そうではないか。C改名に踏み切り、「イカレ」君として登場してもらうことにした。

　同一の猫なのに名前が違う。これは意外に、現実によく起こる事態だろう。ノラネコを半ば家猫とし、名前をつけて可愛がっていたら、近所で別の名前で呼ばれて餌をもらっているのを目撃して一瞬ドキッとした経験が僕にもある。しかしもちろん大切なのは、いずれにせよそれが同じ一匹の

猫であるという事実だ。同一性を作り出すことは原理的に不可能かもしれない。だがともかく、自分の読み取った「ダンゴ」像をできうるかぎり忠実に再創造して「イカレ」になったのだと、訳者としては主張するほかない。

　猫は七つの命をもつと西洋のことわざでは言う。名前を変えて異国で別の生活を営むのは猫にふさわしいことかもしれない。そして猫以上に、それは「文学」にこそふさわしいことであるはずだ。書かれた国の言葉の根っこに深く結びついていながら、不思議にも軽々と離陸して別の土地に――さらには別の時代にだって――しっかりと根づく力が文学には備わっている。だからこそ世界文学という概念が可能になった。逆に言えば、文学は移植すなわち翻訳を必然的に引き起こす。しかもゲーテが自作の翻訳を読んだ喜びを歌った詩にあるとおり、枯れかかっているかに見えた詩が翻訳によって瑞々（みずみず）しく蘇（よみがえ）るという事態だって、決して稀（まれ）ではない。D翻訳は文学の第二の生であり複数の生なのだ。それを夢見ない文学作品などあるだろうか?

　だが翻訳は必然的に不正確であり、正解は原著のみだろうと正論を吐く人もいる。まさにそのとおり。Call me Ishmael.『白鯨』原作の冒頭の一句くらいは僕も知っている。意味は読んで字のごとし。だがこの短文が今までどれほど多様な日本語訳を生んできたことか。そのすべてを並べてみ

れば壮観だろう。二、三比べてみただけでも、各訳者が次々に鯨の泳ぐ海に飛び込んでいくような感じで、一人として同じフォームの者はいない。原文との同一性を求めながら、結果がばらばらとは何事か。しかしそれこそが翻訳のダイナミズムだと強弁したい。翻訳は運動であり、たえざる跳躍である。二言語の隔たりへと向けて、訳者はえいやっと飛び込むほかはない。自分のフォームが一番美しいと信じてのことだが、はたから見てどうかはわからない。しかし跳躍のスリルには他に代えがたいものがある。[E]翻訳を読む愉しみもまた、そんな運動感覚につながっているはずだ。人間の言語が複数であるがゆえに可能になる「生の飛躍（エラン・ヴィタル）」。翻訳とはそれをたっぷりと経験させてくれる営みなのだと思う。

※注　『白鯨』……アメリカの作家ハーマン・メルヴィルの長編小説。一八五一年刊。エイハブ船長がモービィ・ディックと呼ばれる白鯨を追跡する物語。

問一　傍線部A「待つ間を惜しんで、メルヴィルの原文に移行しようという気には残念ながらならない」とあるが、それはなぜか。**二〇字以内**で説明せよ。

問二　傍線部B「優れた翻訳とは、どうしたって『翻訳調』を帯びる」という理由は何か。文中の言葉を用いて**三〇字以内**で説明せよ。

問三　傍線部C「改名に踏み切り、『イカレ』君として登場してもらうことにした」とあるが、作者がそのようにしたのはなぜか。**六〇字以内**で説明せよ。

問四　傍線部D「翻訳は文学の第二の生であり複数の生なのだ」とあるが、それはどのようなことか。**五〇字以内**で説明せよ。

問五　傍線部E「翻訳を読む愉しみもまた、そんな運動感覚につながっているはずだ」とあるが、それはどのようなことか。**八〇字以内**で説明せよ。

問一

問二

問三

問四

問五

第七講　傍線部理由説明問題解法　解答

問一

翻訳を堪能するだけで満足してしまうから。

問二

学究的蓄積の上に立って異言語で原典を忠実に訳しているから。

問三

手に負えない黒猫の名前がフランス語で「気の触れた」という意味の形容詞であり、その意味を表す日本語は「イカレた」だから。

問四

翻訳は、古い文学を新しい時代に伝え、また、文学を複数の言語で別の土地や別の時代に伝えるということ。

問五

翻訳は、原文と母語という二言語間の隔たりに対して同一性を求めながら、それぞれ異なる結果になるが、翻訳文学を読む楽しみも、その同一と差異を味わうことだということ。